

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.3

本文 今回のことわざ：人を呪わば穴二つ

---

こんにちは。大和武史です。  
今回のことわざは、憎しみについてです。

皆さん、誰か憎んでいる人がいるでしょうか。  
あるいは、憎むというところまでいなくても嫌いな人は  
何人かいるのではないのでしょうか。

嫌な上司、ライバルの同僚、恋がたきなどあいつなんか  
いなければいいのにと思っている相手はいませんか。

まだ、この程度ならいいのですが、これが深い因縁になり、  
あいつのせいで自分がこんな目にあつた、あいつさえいなければ  
自分は不幸にならなくて済んだのと思うようになると、  
このことわざの世界に入ります。

「人を呪わば穴二つ」とは相手を憎んでいると、自分も不幸に  
陥っていくということを言っています。  
ある人を嫌いになり、色々な事柄から更にそれが高じて憎しみに  
変わると、あなたには積極的に相手を害したいという感情が  
芽生えます。

この感情は、悪の波動であり、色々な争いを招き寄せます。  
まず、自分の言葉、態度に毒々しさが漂うようになります。  
そして、生活そのものが色あせて見えてきます。

つまらない毎日に、更に憎しみが増長されます。こんな精神状態に  
陥ってしまうとあなたと接触する人達は微妙にあなたの悪意を  
感じます。それに同調しない人達はあなたから遠ざかり、逆に  
同調する人達が寄ってきます。

こうなると、毎日の生活そのものがどんどん悪くなっていき、  
やがて何らかの形で破局が訪れます。呪われた相手も破滅するかも  
知れませんが、自分の人生も台無しになるんです。

皆さんが考えている以上に、呪いの効果というものは大きくて  
人生そのものを壊してしまうこともあります。逆に人を愛している人は  
自分の生活に愛が入り込んできます。他人を愛している人達と  
波長が合うようになり、そうした集いの中でよけい愛情が増幅されます。

愛を持つ人達が集えば、夢の多い、憧れの多い生活になるのは  
良くわかりますね。もちろん、結果はどうか分かりません。でも、  
夢を抱いて生活できるだけでも幸せだと私は思います。

世の中には、夢も希望もなく毎日地獄のような生活を送っている  
人だっています。そんな人に比べたら幸せですね。

結局ね、毎日の自分が考えていることが自分の世界を規定するんです。  
毎日、肯定的な意見を持ち、積極的な行動をとっている人は明るい  
未来を築いているのと同じです。逆に、人を憎んで相手の不幸ばかり  
願っているような人は暗い未来を引き寄せることになります。  
「人を呪わば穴二つ」です。気をつけて下さいね。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.4

本文 今回のことわざ：長者の万燈より貧者の一燈

---

こんにちは。大和です。  
今回はこのことわざを選んでみました。これは文字どおり金持ちが献灯した一万本の蠟燭よりも貧しい人がその苦しい生活の中から献灯した一本の蠟燭の方が尊いという意味です。

これが何を意味するかというと、同じもの、行為でも送った人の気持ちによって、あるいは受けた人の気持ちによって価値が変わるという事ですね。

私がこの頃つくづく考えるのが、この価値観の事です。たとえばお金にしてもその値打ちは一定ですが、そのお金の使い方によって本当の価値は違うのではないかと思うのです。

たとえば、パチンコに行って一時間も保たずに無くなった一万円と障害者への寄付として使った一万円が私には同じ価値とは思えないのです。

どちらも一万円の出費であることには変わりありません。しかし、パチンコの場合は自分の気持ちとしては悔しいだけです。また、その一万円は暴力団の資金になるかも知れません。でも、寄付の方は気分は何か良いことをしたような誇らしい気持ちになりますし、そのお金で車椅子などが困っている人に送られる資金になります。

自分の気持ちにおいても、後の効果においても大違いです。大事なことは金銭的な値打ちではないのです。それを扱うときの気持ちです。これにより価値は大きく異なります。

ところが現代人は、この気持ちの方よりも金額の方を求めています。そして、いつまでも満足できずに闘争ばかりしています。お金などいくらあっても満足することはありません。

本当の価値が低いからです。愛情のこもったもの、お金でも良いですが、こうしたものは価値が高いんです。こうした価値の分かる人間になる必要があるでしょう。そして、その後に価値あるものを創造できる人間になりましょう。

「長者の万燈より貧者の一燈」です。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.5

本文 今回のことわざ：覆水盆に返らず  
(ふくすいぼんにかえらず)

---

こんにちは。今回は「覆水盆に返らず」を選んでみました。

このことわざの意味は盆の上からこぼしてしまった水はもう元には戻らないという意味です。

人生の途次において色々なことが起きます。  
中には失敗もあります。そうした失敗はもう取り返しがつかないということですね。

起きてしまったことはたとえ意図せぬ結果に終わってしまったとしても、やり直しはきかないのです。

私たちが毎日、行うことが何らかの結果を生んでいます。  
そして、起きてしまった結果はもう覆すことができないのです。

これがこの世の理法ですね。  
ならば、私たちは良い結果を出せるように努力するしかないのではないのでしょうか。

起きてしまった結果を嘆いているのではなく、次に来る結果を  
良きものとするべく努力することこそ必要なことだと私は思うのです。

そのためには、悪い結果が出たときは反省をすることです。  
もう起きてしまったことは取り返しがつきません。  
「覆水盆に返らず」です。しかし、これをいつまでも悔やんでいても  
何も良いことはありません。

私たちがやるべき事は、悪い結果を悲観することではなく、  
この悪い結果が出た原因を考え、反省することなのです。  
その原因が自分の態度や行為、言動によって生じたかあるいは  
誘発されたのなら、二度と同じ過ちを繰り返さないように誓うことです。

この反省によって初めて、起きてしまった悪い結果が  
教訓に変わるわけですね。そして、この次からはより良い結果を  
出せるように進歩するわけです。

「覆水盆に返らず」自体はここまで意味していませんから、  
何か悪い結果が出て使用するときは、  
「覆水盆に返らずというから、今回のことをいつまでも嘆くのは止めて  
二度と同じ過ちを繰り返さないように再点検をしよう。」  
というように使ってください。

本文 今回のことわざ：船頭多くして船山に登る  
(せんだうおおくしてふねやまにのぼる)

---

こんにちは。大和です。  
今回はこれを選んでみました。

このことわざの意味は、船を操縦するのに船頭が多くいすぎるとなかなか意見がまとまらず、そうこうしている内に船が陸に乗り上げてしまうという意味です。それを更に誇張して山に登るという表現をしています。

これを聞いて思い当たる人はいないでしょうか。  
たとえば、会議をしていて発言者が多くまたその意見が多様で時間ばかり費やしてちっともまとまらない事などは良くあると思います。

また、現在の政治などはこの典型とも言える気がします。  
多くの政党があり、またその中に多くの派閥があってなかなか意思統一ができずに優柔不断な政治を行っているのが現実ではないでしょうか。  
そのうちに山に乗り上げるようなことがなければよいですが。

民主主義のルールとして多数決ということがあります。  
またその採決に至る過程で、なるべく多くの人々の意見を聞き少数意見も尊重した上で多数決により意志決定をするのが基本になっています。

この原理により民主政治は発展してきましたが、もうそろそろ限界に来つつあるかなというのが正直な感想ですね。  
中心的な人物もなく、あまりにも多数の意見が出てくるために意思統一ができなくなっています。

衆愚政治に堕してしまう可能性があります。  
もともと民主主義は良識のある人々の全体を思っている意見を取り上げ、議論を尽くして多数決に付するのが原則です。

つまり、自分の都合を言うのではなく全体にとって良い方向をみんなで考えようという事なんですね。このような意見を多数から集約すればより良い方向性が見いだせるという考え方です。

現代の人々の意見は自分の都合がほとんどなんです。全体の利益のためではなく、自分の利得のための意見が多くて価値観の違う人々の間で意見が対立するんですね。当然です。

民主主義の基本は、全体にとって良いと思われる意見を集約する事です。  
このことに私たちは気をつけなくてはならないと思います。  
そうでないと、「船頭多くして船山に登る」ですよ。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.8

本文 今回のことわざ：身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ  
(みをすててこそうかぶせもあれ)

こんにちは。大和です。今回のことわざは「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」です。

この意味は、捨て身になってこそ難関を突破することができるという意味で「虎穴に入らずんば虎児を得ず」も関連です。

私たちには時折、困難と見えし事柄がやってきます。色々な失敗体験であったり、何かの悲しい出来事であったり、誰かの厳しい言葉であったりしますが、いずれにしても何らかの困難を自分にもたらず場合があります。

このような場合に私たちはまず保身的になります。つまり、自分を守ろうとする言動をとるのが普通です。自分がつらい立場に立たされれば立たされるほど自分自身を守る意識が強くなります。

その結果、いいわけをしたり、嘘をついたり、お世辞を言ったりして我が身を守ろうとします。これはある意味では生物的本能とも言えるのですが、これらが更に事態を悪くする 경우가往々にしてある事を承知していなければなりません。

この自己保身は無意識のうちに出てくるのですが、これを持ち続けている間は精神的な成長は鈍いのです。大いなる成長を得る鍵は、この自己保身を捨てることです。

我が身ばかり守ろうとせずに、相手の立場を考え、全体の利益を優先して身の振り方を決めていくことです。それには、自分にとっては苦しい方を選択しなければならない場合も多々あると思います。

でも、それによって他の人々もあなたが精神的に優れた人であることを知るのです。自分をかばうことは誰でもしますが、自分の利害を越えて物事を判断し、実行することはなかなかできることではありません。

優れた人を見分ける一つの方法でもあります。世の中の悪はほとんどがこの自分のための言動が原因です。彼らの主たる関心事は自分のことであり、他の人や周りの環境のことは関係がないのです。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」とは精神的に身を捨てるように自己保身を断ち切って他人や全体の事を中心に考えるようにすると、自分が周りから認められ役に立っていくというように解釈してもよいと思います。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.9

本文 今回のことわざ：人事を尽くして天命を待つ  
(じんじをつくしててんめいをまつ)

---

こんにちは。今回は「人事を尽くして天命を待つ」を選んでみました。

これは、人間として出し得る力は大自然に比べると微々たるものに過ぎない。これ以上は出せないという最大限の人力を尽くしたら後は天が下す運命に従うだけであるという意味です。

誰でも何か実現したい夢はあるでしょう。その夢に対して努力してみることが第一ですね。そして、最大限の努力をしたら後の結果は自分の力ではどうにもならないので運命にまかせることです。

これを逆に結果を手に入れようと、策略に走るようになると大変な間違いが起こります。つまり、結果を手にするためには手段を選ばないという人です。このような人は自分の夢を実現すること以外は何も頭に浮かばない、一種の麻痺状態になっているわけです。

完全なエゴですね。他人を陥れてでも自分が成功しようという考え方は大変危険です。社会への反逆と考えてもいいと思います。

このような傾向は現代があまりにも形あるものに、そして結果主義に陥っているのが原因であると思います。まるで結果が全てであって途中の過程は一切関係が無いかのように考えられているのが原因です。

でも本当に大切なのは実は、結果よりもその過程と本人の経験なのです。たとえば、テストで100点とることを考えてみましょう。

結果だけを実現すればよいなら、カンニングでも何でもすればよいでしょう。でも、カンニングで100点とったところで本人の頭の中にはその勉強は全然入っていませんから、勉強が身につくことはありません。

この状態でずっと続けていたら、知性が身に付くはずはありません。むしろ、一生懸命努力をして50点であっても間違った50点分を更に復習して、次は60点取り、その次は70点とるといような事の方がはるかに本人の知性を形作る上では効果が上がっています。

努力するたびに少し筒効果を上げていき、やがて目標に到達するこれこそ素晴らしいことではないでしょうか。いや、結果は目標にもし届かなくてもその努力の中に大切なものが光っているのです。

私たちは直接成功を作り上げることはできません。できることは努力することだけです。それが結果となって現れてくるだけです。

一生懸命努力すること、これが一番大切です。その次に結果はくよくよ考えずに天に任せることです。結果よりも努力の過程をよりよいものにすることを検討すべきです。

「人事を尽くして天命を待つ」という事を実行してみてください。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.10

本文 今回のことわざ：知って知らざれ  
(しってしらざれ)

---

こんにちは。今回は「知って知らざれ」を選んでみました。

このことわざの意味は、良く知っていることでも有頂天になってしゃべっていると軽薄な印象を与える。知識や才能があっても、これをひけらかさないで、初めて知った風に振る舞うのが内容のある人間であるというような意味です。「能ある鷹は爪を隠す」が関連語です。

このような意味ですが、現代のような複雑な人間関係に生きていますと色々な誤解が人間関係をこじらせて私たちの人生を困難なものにしています。

この人との関係において、非常に間違いやすいのが、他人を詮索し、興味本位でうわさ話をする事です。

なぜか人間は人のうわさ話が好きですね。そして、逆に自分が一番嫌いなものが自分に対する噂なのです。

ですから、特に他人のことを知ってもすぐに噂するようなことはせず、知らない振りしている方がうまくいくのです。

また、人が自分を悪く言っているのを聞きつけても、知らない振りして聞き流すことです。人の噂も75日というではありませんか。

そんな噂に気を取られて悔しがっても何も自分の得になることはありません。逆に心乱れて間違いを起こしたり、失敗したりするだけです。

ならば、気にせず聞き流しましょう。聞かなかったことにすればよいのです。難しいことはありません。

そして、自分のことが聞き流せるようになったら、他人のことを言うのを止めましょう。自分の嫌なことは相手だって嫌なのです。

自分の心の中だけに留めておいて人には話さないようにしましょう。「知って知らざれ」です。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.11

本文 今回のことわざ：仏も昔は凡夫なり  
( ほとけもむかしはぼんぷなり )

---

こんにちは。今回は「仏も昔は凡夫なり」です。

このことわざの意味は、仏はもともと仏だったのではなく、修行を積んで仏になったのである。誰でも努力をして修行を積みれば仏になれる。というような意味です。

ここで言う仏とは死んだ人のことではなく、悟った人のことを言います。悟りを開いて他人より知恵を蓄えた人のことです。

また、ここで言う悟りとは仏教的な悟りだけを意味しません。現実の生活における個人的な信条、あるいは仕事における効果的な手法など現実的なものをも含みます。

要は、他人よりも優れた認識、能力などを確立することをいうのです。でも、これらは全て後天的なものです。

生まれたときに既にこんなものを持っている人など一人もいません。その後の人生で、後天的につかみ取ったものなのです。

そのためには、ただ漫然と毎日を過ごすのではなく、後で大いに実りになるような人生の過ごし方をしなければなりません。

この差が結果となって現れたものが悟りであり、仏であるからです。毎日、少しでも努力して向上しようという意識と行動の積み重ねが非凡な人柄を創造するのです。

「仏も昔は凡夫なり」と言って怠け心にむち打って努力しましょう。そうすればやがて平凡から非凡へと飛躍できるはずです。



[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.12

本文 今回のことわざ：裸で物を落とした例なし  
(はだかでものをおとしたためしなし)

---

こんにちは。今回は「裸で物を落とした例なし」です。

このことわざの意味は、読んだとおり裸では何も身につけていないので物を落とすということはないということで、無一文の者は何も落とすことはない、しまったり、隠すから落とすのだというような意味です。

世の中には、どうしてもこれだけは失いたくないというものを誰でも一つは持っているものです。

多い人は10もある人もいるでしょう。お金や家や車や地位や肩書きや会社や家庭、家族や自分の命など数え上げれば切りがないのではないのでしょうか。

もちろん、これ自体は自然な感情ですし、決して悪いことではありません。しかし、あまりにもこれに固執しすぎると、悪い結果を招くことも多いのです。

何かあるとすぐに守りに回ってしまう人がいます。建前ばかりが先行して、本音で話ができない人もいます。また、自分が不利になると頑なに自分の主張だけを繰り返し、他の人のいうことを聞こうとしない人もいます。

こうした人達は、あまりにも守ろうという意識が強すぎるのだと私は思います。失うのが怖いのでしょう。だから、必死になって守ろうとするのです。

このようなときには、逆に裸になってみるのも良いと私は思うのです。失うものもなくなってしまうえば、心は軽くなります。身構える必要が無くなりますし、素直になれます。

実際に捨てる必要はありませんが、自分が掴んでいるものを一度離してしまっただけで自由になることです。裸になるのです。心の中で。

そうすれば、今までとは全く違った素直で飾りのない自分にお目にかかれるかも知れませんよ。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.13

本文 今回のことわざ：全ての道はローマに通ず  
( すべてのみちはローマにつうず )

---

こんにちは。大和です。

今回は、「全ての道はローマに通ず」を選んでみました。  
意味は、ある目的を達成する手段はいくつもある。そして、一つの真理はどんな道にも通じるというたとえ。  
ローマ時代には全ての道は首都ローマに向かって通じていたことから来たたとえ。

私流に解釈すると、どんなことを通じて道を究めていっても最後は同じところへたどり着くという意味に感じています。

つまり、芸術なら芸術を極めると、やはりそこには一つの悟りのようなものが生まれます。  
マネにしてもモネにしても、自分特有の芸術的悟りに達しているはずですね。

そして、仕事、何でもよいですが一つの仕事を極めていけばやはり一つに悟りに至るわけです。  
もちろん、悟りに中身自体は違います。しかし、共通なのは自分が努力の結果オリジナルに手に入れた悟りであり、他人とは違ったものであるということです。

自分固有の悟りを手にすることにおいて、そしてそれによって自分が成長し、進歩するという点において同じ道に通じるのです。何から入っても頂上を極める術はあるということですね。

本当に全ての道は究めることができれば、頂上に通じているのです。悟りという名の成功という頂上です。

「全ての道はローマに通ず」という言葉を念頭に置いて、自分が得られる範囲の職業の中で全力を尽くす事です。どこからでも、頂点は極めることができるからです。私たちはとかく他の仕事を羨むものですが、現在の仕事の中に最高の幸せに至る道が用意されていることを知って欲しいと思います。

本文 今回のことわざ：正直の頭に神宿る  
(しょうじきのこうべにかみやどる)

---

こんにちは。今回は「正直の頭に神宿る」を選んでみました。

これは、その言葉のとおり、正直者が損をするということではなく、必ず神仏の加護があって、物事が最善の方向に進んでいくという意味です。

この意味からすると、現在は必ずしもこのとおりでない場合も多いと思います。

皆さんどうでしょうか。

このことわざに反して、正直者が損をすることは何処にでもあるのではないのでしょうか。

取り立てて、例は挙げませんが、あなたの身の回りにもこんな事柄はよくあるのではないのでしょうか。  
「悪人世にはばかる」ということわざもあるように、正直者よりもとかく悪人の方がよい目をしているような気がしますね。

でも、短い視点ではなく、長い目で見たときには表題のことわざは正解なんです。

短期的には、確かに正直者が馬鹿を見るような事も多いと思います。しかし、それらの事柄は自分の正直度を試すテストだと思っていただきたいのです。

私たちは試されているのです。本当の正直者であるか、偽善者であるのか。  
本当の正直者は結果がどうあれ、正直にするしかない人です。  
偽善者は結果が芳しいときだけ正直になるのです。  
このテストを受けさせられていると思っていただいて間違いありません。

正直者の頭に神が宿るのは、そのような利害を超えた人だけです。  
正直者というのは利害を超えているから、幸せなんですね。  
利害に執着していると、喜怒哀楽が激しくて心の平安がないのです。  
幸福とはまず自分の心が平静になり、安定することから始まるのです。

正直者であるということは、利害に疎いと言うことであり、すなわち、心がいつも安定しているということです。  
利害によって、悔しがったり、絶望したりしないということです。

神が宿るということは何でも成功するということではありません。  
自分の心が幸福になるということです。それにはこの世的な成功は必要ないのです。  
この世的な成功を越えたところに、本当の幸福があり、正直者がいるわけです。

この世の利害に飽き飽きしたら、どうですか。  
「正直者の頭に神宿る」を実行してみても。

本文 今回のことわざ：愚公山を移す  
(ぐこうやまをうつす)

---

こんにちは。大和です。

今回のことわざは「愚公山を移す」です。  
意味は、物事は急がず、無理をせず、こつこつと真面目に  
努力すれば必ず希望通りの事が成し遂げられるというたとえ。

昔、中国に愚公という老人がいた。この人は家族と共に二つの山を  
越えた所に住んでいたが、年齢も90に近いのでこの山歩きが  
辛くなった。

そこで家族を集めて「この二つの山をどこかに移そう」と相談した。  
家族の中に知者といわれる老人がいて、  
「あなたの年齢と体力でそのようなことは到底不可能だ」  
と止めたところ、愚公は「私には子もあり、孫もある。そして、  
子や孫もやがて子や孫を作るから、子々孫々この仕事を受け継いで  
いけばよい。山はいつまでも今のままで、大きくはなるまい」と言った。  
時の天帝は愚公の根強さに感心し、山を他に移してやったという。

このようないわれのことわざのようです。  
まあ、現実に山を移せるかどうかは別として、  
他の人々から見れば到底不可能なことを、子々孫々に渡るといって  
長い時間をかけてでもやり通そうとした気概に感心したのでしょうか。

確かにこういう話は少なくなりました。  
皆、小さな目先の成功ばかりを目指しているのが  
現代社会ではないでしょうか。

当時の山を移すということは現在で言えば、首都を移転するとい  
うことくらいに該当するのではないのでしょうか。  
首都移転に賛成しろといっているのではありません。

自分の小さな成功や出世やお金儲けに一生懸命になっている  
私たちですが、そんな小さな事を思うのは止めて大きな目標を  
掲げたときに目先にこだわる態度は必然的に消えるものです。

自分で何々しなければならぬとストレスを作っているのが  
現代人なのです。大きな心を持てばストレスも解消されるかも  
知れませんが。

本文 今回のことわざ：天知る地知る  
(てんしるちしる)

こんにちは。今回は「天知る地知る」です。

ことわざの意味は、悪いことは誰も知るまいと思っても自然と現れるものであって決して隠し仰せるものでない。中国で王密という人が高官であった揚震の家を深夜密かに訪れて賄賂を送ろうとしたとき揚震はこう言って断った。

「天知る地知る我知る人知る」というもので、後年、「四知の戒め」として尊ばれている。

「今あなたが行おうとしている悪いことは、私とあなたの他に天地の神々と、やがて他の人が知ることになりましょう。悪いことや不正は隠そうとしても、必ず現れるものです。」

このような意味合いのことわざです。現代には、政治や各種の社会、組織において様々な不正が行われています。

賄賂や汚職、職権乱用など数えれば切りがありません。非常に乱れた社会ですが、この原因は何でしょうか。

それは悪い人が増えたということなののでしょうか。否、その原因はこのことわざのように人々が悪を断る勇気を無くしてしまった事に他ならないのです。

このことわざの王密のように、皆が悪をはねつけていればこんなに社会は乱れることはなかったはず。それを「バレなければよい」とか「誰でもやっている」とか言って自分を正当化し、悪を承知で引き受けているところに問題があるのです。

大きな事で死ぬまで隠し通せることは一体どれだけあるのでしょうか。誰にも一言もしゃべらず、気にしないで普通の生活を続けていける事柄はどんなレベルのものでしょうか。

人に知れば自分の首が飛ぶような、そんな大きな事を心にしまい込んでも苦しくなるだけです。公明正大な心こそ、何にも変えがたい自由な心ではないのでしょうか。誰に対しても何処を見られても平気な心こそ正しい心であり、強い心であるわけですね。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.17

本文 今回のことわざ：足るを知る者は富む  
(たるをしるものはとむ)

---

こんにちは。今回は「足るを知る者は富む」を選びました。

このことわざの意味は、本当の富貴者は財産家ではなく、身分相応のところで満足している精神的な富者である。金で満たされる者は金で滅びる。という意味です。

現代人はとにかく何かを欲しがっています。たとえば、車やマイホームや彼女や彼氏、それにお金と旅行など数え上げたら切りがありません。

経済そのものが消費によって潤うことを目標としていますからある程度やむを得ないのかも知れませんが、これらの商業主義にも煽られて、私たちは次から次へと

商品や地位や名誉などに欲望を膨らませているのが現実です。このような欲望には足るということがありません。次から次へと新しい欲望が湧いてきます。

まるで底なしの沼に沈み込んだように欲望には切りがないのです。しかし、このような状態は私たちにほんの少しの間の満足感と引き替えに長い間の羨望の気持ちを与えてくれるだけです。

物質も有限ですから人々が欲しいだけ作っていたらやがて資源が枯渇してしまいます。足ることを知るという事が今、本当に必要だと思えます。

現在只今の自分で満足できるということが限りない羨望から解放されるということであり、ささやかな幸福を見つけたということではないでしょうか。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.18

本文 今回のことわざ：歳寒くして松柏の凋むに後るるを知る  
(としさむくしてしょうはくのしぼむにおくるるをしる)

---

こんにちは。大和です。  
今回は少し長いことわざを選びました。

このことわざの意味は、松や柏は常緑樹である。しかし、これらの木が常緑樹あることは夏の間には分からない。寒い冬がやってきて他の木の葉が落ちてしまったとき、松柏がいつも青々として茂っていることがわかるものだ。

人間にしても同じ事で、何か困ったことが起こると始めてその人の真の性質が分かるものという意味です。

こんな事は世の中には良くあることですね。  
普段は人の値打ちというものは良くわからないのですが、いざというときにその人の片鱗を垣間見ることがあります。

自分が窮地に陥っているときに、一緒になって方策を考えてくれたり、あるいは普段はおとなしく無口なのに、何か事件が起きて人々が気が動転しているときに、その人が冷静に人々を指導したり、逆に、いつもは調子がよいのに、いざというときには慌ててしまって役に立たない人もいます。

人間の本当の評価はこのようなときにならないと分からないものですね。何気ない人に驚くような才能があったり、仕事の能率の悪い人に全く違うジャンルの仕事をさせたら別人のように猛烈にこなしたり、人間とは全く分からないものです。

誰でも自分の中に、自分ですら気づいていない才能を秘めています。それを発揮できる仕事を天職というのです。私たちの中にも必ずあります。それに気づく事が幸福への近道です。どうか私と一緒に探してみませんか。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.19

本文 今回のことわざ：道は近きにありて遠きに求む  
(みちはちかきにありてとおきにもとむ)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「道は近きにありて遠きに求む」です。

このことわざの意味は、物事の真実は身近なところにあるものだが人は良く理屈をこね回して高遠な世界にそれを求めようとする。その結果、かえって真実を見つけにくくしている。難解な理論ばかりに走って、自分の足下を見つめようとしない学問の姿勢を戒めた言葉です。

これは孟子の言葉のようです。  
非常に趣がある言葉です。良く人間を心得ている方なのでしょう。とかく人々は、自分の理論を発表しようとするときは難しく言ってしまうがちです。

自分が何年間もかけて研究した論文をすぐに分かってたまるかともも言っているかのように難解な発表をする人が多いですね。でも、これはおかしいのです。

本当にその事柄に精通している人は、その事柄を素人にも分かるように説明できます。  
本当に分かっているから、相手に合わせて説明ができるのですね。

ところが、中途半端にしか分かっていない人は自分が知っている言葉でしか説明ができません。たとえ話も無理です。質問しても分からないときは難しいことを言い出して煙に巻いてしまいます。

こんな学者が多いのではないのでしょうか。  
素人と話をする機会を多く持たれるといいと思いますね。そうすれば、いやでもわかりやすく話す必要が生まれてきますし、そのために、自分自身がさらにその意味を掘り下げて解釈し直す必要が生じます。

そして、完全な理解が生まれ、わかりやすく説明できる能力がつきます。  
学問とは本当に奥が深いものです。



本文 今回のことわざ：奇貨置くべし  
(きかおくべし)

---

こんにちは。大和武史です。

今回は「奇貨置くべし」を選んでみました。  
このことわざの意味は、見込みのある珍しいものは貯えておくべきである。時期が来て売れば、大きな利益を得ることができる。

物ばかりでなく、将来を期待できる人物はかくまっておくべきであるという意味もある。

秦の太子であった子楚は秦王の人質として趙王の元に監禁されていた。呂不韋という商人が趙の都に行ったとき、子楚を気の毒に思い身柄を引き受けることを申し出たが、

子楚は「まずあなたの家を興してから私のことを心配して欲しい」と承知することを渋った。そこで、呂不韋は「私の家はあなたの家が栄えると自然に繁盛するのです。だから将来のことを期待してあなたのことをかくまうのです。」と言った。

果たせるかな、子楚は秦の昭王となり、呂不韋はその大臣として迎えられたという故事による。

貴人という言葉があります。地位や身分の高い人という意味ですが、これにはもう一つ意味があって、その字の通り「貴い人」という意味があります。

自分にとって貴い人、自分の人生を決定づけるような人のことを言います。この貴人に会うということによりそれまでの人生とは明らかに違う人生が始まる場合があります。

今までの価値観を一新してくれるような人、その人の言動により新しい価値観が芽生え、情熱に満ちた人生が展開するような人との出会いは長い人生に一度あるか無いかです。

しかし、本当にそうした人との出会いというものはあります。できれば、そのせっかくの貴人と出会う機会を逃さないようにしたいものです。

本文 今回のことわざ：喉元過ぎれば熱さを忘れる  
( のどもとすぎればあつさをわすれる )

---

こんにちは。大和です。  
今回は「喉元過ぎれば熱さを忘れる」を選んでみました。

意味は、熱いと感じるのは口から入って喉の入り口を通りすぎるまでのこと。何かに懲りてもすぐ忘れること。です。

とかく人々は、何か自分が間違いをしたり、あるいは失敗をして上司に迷惑をかけたり、また損をしたりして一時は懲りるのですが、すぐにそれを忘れて、再び同じような状況に陥ってしまいます。

これは、その場を何とか切り抜けるともうそれでほっとしてしまっただけで今回の失敗を反省してその原因を考え、二度と同じ過ちを繰り返さないよう心がけるという意識がないからですね。

この反省という意識がないために、何度も何度も同じ過ちを繰り返すことになります。  
それというのもこのことわざのような苦しいことも過ぎてしまえばすぐに忘れてしまう性質があるからでしょう。

よっぽど大きなダメージを受けた場合には忘れるにも忘れられないでしょうが、軽微なダメージの場合にはまるで自分に偶然不幸な出来事が降りかかってきたように、不運だったというだけで済ませてしまうようです。

こうなると、この失敗は単なる失敗以上のものには成り得ず悪くすると、何度も同じ事を繰り返す事にもなりかねません。それもこれも喉元過ぎたら熱さを忘れてしまうからです。

一生大事に記憶している必要はありませんが、反省して、その失敗を教訓とするまでは忘れてはいけません。  
喉元過ぎても熱さを忘れず、今後二度と同じ事を繰り返すことのないよう注意しましょう。

本文 今回のことわざ：曾参人を殺す  
(そうしんひとをころす)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「曾参人を殺す」です。

ことわざの意味は、嘘でも度重ねて言われると、「あんなに言うのだから本当かも知れない」と信じるようになるたとえ。  
孔子の弟子であった曾参は、品行が良くそのうえ親孝行で母親の信頼を得ていた。

ある時、そそっかしい者が母親のもとにとんできて「曾参が人を殺した」と言った。母は曾参を信頼していたので、これは虚言だと思って信じなかった。

事実、これは曾参と同名の者がやったことで思い違いであった。ところが、その思い違いが広まって噂となり、二人目の男がまた母親に同じ事を告げた。

このときも母は仕事の手をちょっと止めたただけであったが、三度目の男がまた告げに来たとき、今度は「三度目の正直」ではないけれど、曾参の母は血相を変えて飛び出してしまったという故事によります。

人間の信頼というものはかくも薄っぺらなものかと思わせられます。やはり、心の中では信じているのですが、何度も何度もこの場合は三度ですが、言われると自信がなくなってくるのですね。

自分としてはまさかそんなことはあるまいと思っているのですが、ひょっとしたらという思いがよぎってくるのですね。そしてそれが疑いの心呼び起こすことになります。

人間というのは本質的に疑いの心を持っているのでしょうか。どんなに親しい間においても必ず、誤解が生まれるように相手を疑うことを決してしない人などいないのではないのでしょうか。

おそらく動物的な生命保存の必要から来る警戒心はその根底ではないかと思いますが、誰にでもこの疑いの心はあると思っていなければいけないでしょう。

ですから、たとえどんなに親しい仲でも、たとえば親友、親子、夫婦、兄弟であっても完全に信頼されることはないし、またそれを期待すること自体が間違いであると思っていた方がよいと思います。

よって、信じられているから大丈夫とか、仲が良いから大丈夫などとたかをくくっているととんでもないことになります。信頼が崩壊したときには憎悪の感情が出てきますから大騒ぎとなる場合があります。

このことを肝に銘じて、日頃から信頼関係を良好に維持するための努力を怠ってはいけません。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] NO.23

本文 今回のことわざ：天は自ら助くる者を助く  
(てんはみずからたすくるものをたすく)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「天は自ら助くる者を助く」です。

このことわざの意味は、他人に頼らず、自分で努力すればやがては神が助けてくれる。自分だけの力、自分だけの行為によって最善を尽くして努力する者には、天は必ず幸せをもたらす。というような意味です。

これははっきり言えば、自分で努力しない人には救いはないということですが、  
つまり、子供でも一緒ですが、人に頼っているうちは決して自分の力にならないわけです。

自分で服を着ることのできない子供に親が服を着せるのですが、いつまでもこれをしていると子供はいつまで経っても自分で服を着るようにはなりません。

自分で着ようとする子に助けるのはよいのですが、いつまでも着せてやっていると本人のためにならないわけです。  
同じように、人生においても人々の苦勞、苦難に対してそれを取り除くことが必ずしも良いこととは限らないのです。

苦しいけれども自分でこれに立ち向かってこれを克服することによって人間は精神的に成長するからです。この機会を奪うことになるからです。

しかし、無条件に助けることはしないけれども自ら立ち向かおうとしている人にはそれがうまくいくように援助はできるし、やりますということですが。

物事がうまくいくかどうかは運にかかる比率はかなり大きいのが真実です。  
自らを助けようと自分の困難、苦難に正面から取り組む人には運が味方してくれるという意味です。

本当ですよ。皆さんも実際に体験して確認して下さい。

本文 今回のことわざ：握れば拳開けば掌  
( にぎればこぶしひらけばてのひら )

こんにちは。今回は「握れば拳開けば掌」です。

ことわざの意味は、同じ掌でも握れば強力な拳となり、そのまま開いておけば、慈悲に満ちた掌になる。  
?同一のものでもその人の意図によって色々と状態が変わる。  
?ものはその時によって状態が違っていても、そのもとは皆同一だということ。

このような意味のことわざですが、私がここでお話ししたいのはこのことわざは私たちのこころを良く表しているということです。つまり、私たちのこころは開けば掌のように大きくなり、閉じれば拳のように小さく堅くなるからです。

私は人間のこころの研究をしていますが、このことわざはまさにぴったりの表現です。

人間のこころというのは、閉じれば、つまり思い詰めると小さな事に執着してしまい他のことが考えられなくなります。そして、まるで拳のように固まってしまうのです。この状態では周りのことに協調することはできず、一人孤独に生きるしか無くなってしまいます。

どちらかという不幸な人生が待っています。これに反して心を開くと、掌のように大きくなり、またそこには五本の指が現れて色々と便利なことができるようになります。ものを掴んだり、鉛筆で字を書いたり、握手をしたりと大変便利に使うことができます。

同じようにこころも外に対して開かれると、様々な良いことが起きてきます。たとえば、友達ができたり、上司に相談にのってもらえたり、また失敗しても自分のこころにしまい込んでいつまでも嘆くことが無くなりますから、早く回復します。

人間は社会的な生物ですから、こころを閉じたままではうまく社会に適応することができないのです。一見、掌より拳の方が強くて役に立つように見えますが実はそうではありません。外に対して開くことによって外界に対する対応ができるようになるのです。

私がここで言いたいのは、掌のことではなく、こころのことです。一人で閉じてしまうのではなく、外に対してオープンにすることです。そうすれば、不思議な力があなたを元気づけることになり、生きる喜びが溢れてきます。

誰に対してもオープンができなければ、特定の人に対してでもいいです。なるべく素晴らしい人を見つけて自分の心の内を聞いてもらいましょう。それだけで心は軽く弾んできます。

本文 今回のことわざ：子を持って知る親の恩  
(こをもってしるおやのおん)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「子を持って知る親の恩」です。

意味は、自分が子を持って親になってみると、  
親のありがたさを始めて感じるものという意味です。

非常に簡単なことわざですが、真実をよく表していると思います。  
誰でも子供のうちは親のありがたみが分からないですね。

でも、自分が親になって自分の子供を気遣い、心配し、  
励まし、成功を祈っていると、自分もこのように親に愛されて  
いたんだなあと思うものです。

当事者が自分のうちは分からないのですが、自分が相手の立場に  
立たされてみると相手に宇事が急に理解できるようになる事も  
よくあるものです。

結局、人々は自分の立場でしかものを考えられないのですね。  
自分の現在の立場、環境でものを考え、判断していますから

わからないのですが、視点を变えて相手の立場や上司の立場や  
親の立場で物事を考えてみると全く違った結論が出る場合があります。  
常に物事は相対的だからです。絶対的な判断というものはあり得ません。  
誰かの立場に置いて、あるいは何かの基準における判断であって

全ての国民、全ての環境に適応するような判断というものは  
不可能です。

ならば、単なる狭い自分だけの偏狭に陥るのではなく、せめて  
相手や上の人達の立場でものを見てみましょう。

それから同じ結論を下してもよいのです。  
たとえ、同じ判断をしたとしても全く自分だけのことを考えて

下した判断とはその性質において違いが出てきます。  
より多くの人達のところが分かる人間はここに深みが出てきます。

エゴの人達とはやがて一線を画するようになります。

本文 今回のことわざ：我を非として当う者は我が師なり  
(われをひととしてむかうものはわがしなり)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回はこのことわざを選びました。

このことわざは、人間は自分の欠点についてはなかなかわからない。  
その欠点を、勇気を出して忠告してくれる人がいたら、  
自分の進歩のために役立つ人であるから、その人は自分の先生である  
という意味です。

人はとかく自分の欠点を言われるのを嫌います。非難や中傷を受ければ  
傷つくように、自分の欠点をズバリと指摘されれば良い気持ちがしない  
のが普通の人でしょう。

しかし、よく考えてみると、大切なことは自分のそうした欠点を  
修正することであって、そのためには自分にそういう欠点があることを  
教えてくれる人というのは非常にありがたい存在であるわけです。

これを言っているのですが、しかしこれには前提条件があって、  
本人が自分の欠点を見つけて修正しようとする意識を持っている  
という事が前提になります。

全然そんな気のない人に欠点を忠告すれば、おそらく嫌な顔をされて  
嫌われるだけでしょう。  
ですから、相手の欠点を忠告する方にはこのことわざは当てはめない  
方がよいと思います。

相手から自分の欠点の指摘めいたことを言われたときに、相手を憎み、  
恨むのではなく、それを逆手にとって自分の精神の向上に役立てて  
いこうとする方へと利用して欲しいと思います。

そして、自らの欠点を修正できた人だけが相手の欠点を指摘すれば  
よいと思うのです。  
自分の欠点をそのままにして人の欠点ばかり指摘していても  
意味がないからです。

人生の中には色々な人の言葉から、様々な気づきを得ることが  
できます。それには自分が絶えず、注意を払って忠実にそれを受け止め、  
応用していく心構えが必要になります。

一步一步前進していくことによって輝かしい進歩がやがてもたらされる  
のです。このことわざのように、周りの人が皆先生とすることが  
できるように気を付けたいものです。

本文 今回のことわざ：人の振り見て我が振り直せ  
(ひとのふりみてわがふりなおせ)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「人の振り見て我が振り直せ」です。

意味は、そのとおり、人のやり方を見て自分のやり方を反省し、直さなければならぬところはすぐに直すべきであるという意味です。

当たり前のようなことわざですが、現代においては実に教訓に満ちていると私は思います。

現代、人の振りを見る人はどこにでもいます。現にあなただってきっと他人をよく見ているはずです。どこの誰彼はどんなことをしているとか、あんな事を言ったとかよく噂をしましょう。

そして批判めいたことを言う事も良くあるのではないのでしょうか。しかし、自分のことはまるっきり見えない人が実に多いのです。

つまり、他人の噂は止めどなくやるが、自分のことは棚上げです。人に噂されているのを聞けば、やっきになって怒ります。人の振りを見るけれど、自分の振りは見えないのです。あるいは見えていても直そうという意志がないのです。

ですから、我が振りを直すと言うことが非常に重要なのです。他人の悪口を言う前に、自分の悪口を言われぬように気をつけましょう。自分に悪いところが無くなった人だけが他人の悪口を言えばよいでしょう。

まずは自分の行いと言葉を正しいものにしましょう。そうすれば、他人から批判されることはなくなりますし、自分の方からあえて批判した場合に、その影響力は極めて大きくなります。

高貴な人が批判する人は極悪の人です。  
ふしだらな人が批判する人は優れた人です。  
私たち普通の人には他人を批判する前に、自分の行いを正す必要があるのです。

「人の振り見て我が振り直せ」です。  
これができれば、普通の人でも高貴な人へと変貌するのです。



本文 今回のことわざ：柔よく剛を制す  
(じゅうよくごうをせいす)

---

皆さん、こんにちは。大和武史です。  
今回は「柔よく剛を制す」を選びました。

この意味は、柔軟なものは強い力が加わっても、自由自在に対応することができるから、折れて壊れるという事が無いというたとえ。

今は、この柔が注目されにくい時代です。  
よく柔道の極意はこの柔にあるというような話を聞きますが、  
今オリンピックなどに出てくる柔道の選手はがっちりとした剛のイメージの選手ばかりです。

剛を打ち破るだけの柔の達人はなかなか育たないのでしょうか。  
相撲でもハワイ出身の巨大な力士に及ばなくなってきました。  
一昔は千代の富士とか小さくても大きな力士を苦もなく破る人もいました。

スポーツだけの話ではなく、私たちの周りにも同様の傾向が  
現れてきていると思います。  
社会で実権を握る人はどちらかといえば、剛の人が多くなりました。

柔の人、人当たりよく、他人に親切で思いやりのある機転の効くような人は  
少なくなってきた、これは誰が何と言ってもこうだという剛の人が  
重要な立場を占めてきているように感じます。

要するに、まだ達人が現れていないのでしょうか。剛を苦もなく打ち破り、  
周りに優しい柔の人が頭角を現さないと、社会がぎくしゃくとします。  
剛の論理だけでは摩擦が多すぎるのですね。

柔らかい、奥の深い、知恵のある人が多く出てきて欲しいと思います。  
そうすると、その集団が上手くまとまるのです。  
ガチガチに固められてまとまるのではなく、柔らかくソフトにまとまる  
のですね。

そんな指導者は、人々を暖かく包み込むようにまとめ上げます。  
その集団には自由と一緒に秩序がもたらされるわけです。  
こういうのが理想でしょう。

早く、そのような人達が指導者となってきて欲しいものです。  
「柔よく剛を制す」です。そのうち出現してくるでしょう。

本文 今回のことわざ：柔よく剛を制す（その2）  
（じゅうよくごうをせいす）

---

皆さんこんにちは。  
今回も柔よく剛を制すについて、考えてみたいと思います。二回目です。

前回は柔の指導者は周りをうまくまとめ上げ、しっくりとした調和を生むのでその登場が待ち遠しいという話をしました。

前回、好評であったことと少しつきたいしたい気がしましたから連載にすることにしました。

皆さん、プロ野球でイチロー選手をご存じですね。  
入団してまだ5年ぐらいだと思いますけれど、もうパリーグの打者ですね。毎年、打率王です。年棒も球界のトップクラスです。

彼の打撃は果たして剛でしょうか、柔でしょうか。  
剛であるとは言えないですね。どちらかといえば柔です。  
当初は振り子打法と言うことで重心を移動しながら打つ、従来の重心を移動させないバッティングからはタブーの打法でした。

マグワイアなどは剛ですね。あの筋肉は素晴らしいものです。  
このイチローの打撃が果たして大リーグで通用するかという話もありましたが、柔が剛に勝てるかという話題に等しい話です。

柔とは単に体力が乏しいという意味ではありません。  
積極的な柔は、無意味な所への力を抜いて必要なところへ集中的に力を加えることを指します。

つまり、完全なリラックス状態からの俊敏な突発的な爆発を指すのです。  
あるいは相手の力を利用し、その制御を崩すことから勝つ事を意味します。

これを修得することは筋肉トレーニングや単なる練習だけでは無理です。  
キーはリラックスです。この状態からの適切な行動こそ柔の本質です。

人間関係においても同じです。  
普段からのリラックスな生活といざというときの瞬発力、  
とっさの判断と大胆な行動が柔の人の特徴です。

自らをコントロールし、自分の利害からではなく、全体の利益から判断することができるひとしかできないことです。

今まではどちらかといえば、剛が注目されてきましたが  
これからは柔の時代です。柔の達人達が現れて、剛を制していく  
歴史が現出してくるでしょう。

ある意味では非常に楽しみな事です。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] 2000 NO.1

本文 今回のことわざ：苦楽は生涯の道連れ  
(くらくはしょうがいのみちづれ)

---

皆さん、あけましておめでとうございます。大和武史です。  
今年も変わりませず、ご愛顧をお願いします。

今年最初のことわざは「苦楽は生涯の道連れ」を選んでみました。  
このことわざの意味は、

人の一生に苦勞はつきものだが、楽しいことだってあるはず。  
苦しんだり、喜んだりしながら、生きていくのが人生である。

という意味です。

2000年の年初に当たって、敢えてこれを選びました。  
それは、今年が色々と激動の時代であることが分かるからです。

昨年もそうであったように、今年も忙しく、めまぐるしく変化する  
年になると思います。  
良いこともあるでしょうし、良くないことだってあるはずですよ。

しかし、そんな時はこのことわざを思い出して欲しいと思います。  
人生には苦もあれば楽もあるわけです。  
苦勞があるから楽が本当に分かるのです。苦勞をしたことがない人には  
楽ということがどういうことであるか分かりません。

多くの悲しみを知った人ほど喜びを感じることができます。  
現在の苦勞や悲しみの中には、私たちが成長させてくれる何か  
秘められているのです。

人生に無駄なものなど何もありません。  
すべては、私たちが生き生きと生きていくための材料なのです。  
苦しみの中にいるときには、それを克服したときの喜びを  
考える余裕はありませんが、私たちがそれを求める求めないに関わらず  
幸福というものは私たちには気づかれずにそっと隠れて寄り添っている  
ものです。

そして、私たちが本当にそれを喜ぶときに限りその姿を現すのです。  
苦も楽も人生の一コマであり、私たちが幸福と再会するきっかけなのです。

本文 今回のことわざ：取らんと欲するものはまず与えよ  
(とらんとほつするものはまずあたえよ)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「取らんと欲するものはまず与えよ」です。

意味は、  
何か相手からものを得ようとするにはまずこちらから与えて  
相手の関心を買えということ。すなわち、少しの損もなしに  
利益を得ようとしても、それは無理であるというたとえ。  
です。

いわゆるギブアンドテイクですが、これもできない人も  
かなり多いですね。何でも自分の利益だけを考えて発言する人も  
どこでもお目にかかれます。

最初の段階がこのギブアンドテイクでしょう。  
自分から与えて相手からそれ相応のものをもろう事です。  
次にもっと効率的になる段階が来ます。

つまり、自分が与えた以上に見返りが来る段階です。  
これには与え方や与えるものの工夫が必要となります。  
いずれにしても、まず与えるということがその後の原因を  
作っているのを知るべきです。

多くを与えることができるほど多くを受け取る資格ができる  
ということです。  
これがさらに発展すると与えきりの世界になります。  
これはもう与えたとかもらったとかの区別の無い段階であり、  
偉人たちの世界です。

ともあれ、私たちはもらうことばかりを考えて、結局もらえない  
現状を省み、与えるということを利己の面から真剣に考える  
必要があるでしょう。

与えることこそコミュニケーションの最良の武器です。  
与えられるものの大きさとその人の人格が決まります。  
皆さんも与えることを心がけてみてください。  
きっと人生観が少し変わるでしょう。

本文 今回のことわざ：驕る者久しからず  
(おごるものひさしからず)

---

皆さん、こんにちは。大和武史です。  
今回は「驕る者久しからず」です。

ことわざの意味は、  
盛者必衰の理は、驕る者には特に厳しく作用するというたとえ。  
平家の例を取るまでもなく、栄耀栄華のかぎりをつくした者は  
急速に滅亡への道をたどる。  
という意味です。

世の中を冷静に眺めてみると、驕る者は何処にでも見受けることが  
できます。政治の世界だけではありません。  
あなたの回りにもきっといるでしょう。

上司や同僚の中に、あるいは友人や親戚の中にもいるかも知れません。  
あるいは、兄弟や両親もそうかも知れません。

いや、ひょっとしたら、あなた自身がそうかも知れないのです。

驚くことはありません。人間なら誰でも驕ることはあります。  
誰でも一度は驕ったことがあるでしょう。  
問題はその頻度です。いつもいつも驕っている人が駄目なのです。

人を見ると驕った態度をする人こそ、悪です。  
その悪は回りに影響を与えます。驕りが伝染します。  
そして、その社会には険悪な雰囲気満ちます。  
人々が逃走と破壊に駆り出されます。

冷たく暗い社会になります。  
逆に謙虚な人は幸いです。回りに良い影響を与えます。  
人々が素朴に純粋になります。

社会は生き生きとやる気にあふれます。  
この違いはその中に人々のこころの違いです。  
驕りと謙虚、それは衰退と繁栄です。

どちらを選ぶかは私たちの日々の選択次第です。

本文 今回のことわざ：盤根錯節に遭いて利器を知る  
(ばんこんさくせつにあいてりきをしる)

こんにちは。大和武史です。  
先週はインフルエンザにかかってしまって寝込んだものですから  
お休みさせていただきました。申し訳ありませんでした。

今回は「盤根錯節に遭いて利器を知る」を選びました。  
意味は、人間の本当の実力は普通の状態では知りがたい。  
色々の苦難にあったときに、初めてその実力のほどが知れる。  
気に斧を入れて切るとき、その斧の本当の切れ味は、わだかまった根や  
入り交じった節を切ってみて、初めて分かるものである。  
という意味です。

盤根錯節というのは難しい表現ですが、わだかまった根と入り組んだ節  
という意味です。  
こういう困難な状況を切り抜けるにはよく切れる斧が必要なわけですね。

ですから、そのときになって本当によく切れる斧がどれか  
はっきりとするというので、

現実にもよくあることです。  
普段は誰がどれだけの度量を持っているかはなかなか  
分からないものです。

それは自分すらよく分かっていないのが本当です。  
いや、自分の方がより分かっていないと言った方がよいかも知れません。  
本当のことを知らずに自分は優れていると思いこんでいる人は  
何処にでもいます。

しかし、人生にはこのような試しの機会というものが必ず  
用意されています。  
非常に困難に遭遇したときにその人がとる態度、行動こそが  
その人の値打ちを表現します。

苦難の時には回りを気にしている余裕がありません。  
背に腹変えられずに対応します。あるいは、逃避します。  
そのときの姿にその人の現時点での真価が表れています。

そのときに、人を思いやるころを手放さない人は幸いです。  
また、そのときに自分の利得より全体の利益を考えることができる人は  
幸いです。

この最悪の時にこそ最良のものを創造するチャンスであることを  
私たちは知る必要があるでしょう。

本文 今回のことわざ：日に就り月に将む  
(ひになりつきにすすむ)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「日に就り月に将む」を選びました。

ことわざの意味は、  
日、一日と事が成り、毎月毎月、ぐんぐん進んでいくこと。  
一步一步努力を積み重ねることによって、学問などをマスター  
していくことです。

関連語は日進月歩です。  
このことわざのように私たちは少しずつ進歩するように  
努力したいものです。

でも、これはある意味では非常に難しいことです。  
学生時代は試験がありましたから、否応なしにそのための勉強をし、  
結果的に内容が身に付いていったわけですが、

社会に出ると、自分のことは完全に個人に任せられ  
会社では与えられた仕事をこなせば、それ以上のノルマはありません。

ですからどうしても仕事を簡単に片づけてのんびりする事を考えます。  
暇があれば、遊ぶことかくつろぐことを考えます。  
それが普通の現代人でしょう。

このような生活をしていると十年経っても場合によっては  
ほとんど進歩しません。現状維持ばかりをやっているには進歩がありません。

一日中、こせこせと勉強する必要はありません。  
自分で許せる範囲で結構ですから、その範囲で何か目標を決めて  
こつこつと努力しましょう。

たとえば、何かの資格を取るとか、何かの技術を身につけるとか  
自分にとって価値の大きいものにチャレンジすればよいと思います。

絶えず、可能性に挑戦している人と毎日をただ漫然と過ごしている人  
では同じ平凡な毎日でも、その年月が結果としてもたらすものは  
大違いです。

「日に就り月に将む」です。時間と共に非凡な自分へと変身を遂げる  
事も可能です。  
一日一日を大切に過ごしましょう。

その一日の使い方があなたを凡人にも、一角の人物にもします。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] 2000 NO.7

本文 今回のことわざ：桃李もの言わざれども、下自ずから蹊を成す  
(とうりものいわざれども、したおのずから  
けいをなす)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は、「桃李もの言わざれども、下自ずから蹊を成す」です。

ことわざの意味は、  
桃やスモモは花も美しいが、実も美味なので、その魅力を慕って  
人々は自然と集まってくる。  
そして、その木の下には彼らに踏み固められて小さな道が自ずとできる。

これと同じで、人徳のある人のところには、自分で吹聴しなくても  
自然に人が集まってくる。という意味です。

蹊とは道のことです。  
道ができるほど人で賑わうという事ですね。

それほど人望があるということです。  
人間の本当の値打ちは、案外こういうところにあるのかも  
知れません。

どれだけ人々に頼りにされるか、慕われるかで  
大体判定できるのです。

この意味から言えば、地位や肩書きよりも、  
最近脚光を浴びたEQ（精神の知能指数）などが  
意味を持つということも頷けると思います。

精神的の魅力の多い人には人は集まって来るんです。  
そして、自分だけのことしか考えないような人からは  
逆に遠ざかっていきます。

自分が友達になりたいような人は、他の人も友達になりたいのです。  
まず、自分を好きになることです。

そして、自分の好きなところをどんどん出していくと  
他の人も自分を好きになってくれます。

どんどん人が集まってきます。  
そして、自分も精神的に成長していきます。

「桃李もの言わざれども、下自ずから蹊を成す」です。



本文 今回のことわざ：極楽願わんより地獄作るな  
(ごくらくねがわんよりじごくつくるな)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「極楽願わんより地獄作るな」です。

ことわざの意味は、  
後生を願って極楽へ往くことを思うより、現世にいるとき  
善い行いを積み重ねて、地獄へ往くような悪い因縁を  
作らないようにするべきだ、という意味です。

ただ、これでは意味がよく飲み込めないでしょうから  
現代風に解釈しますと、

極楽を願う、つまり自分の欲ですね、贅沢な生活、楽な暮らし、  
快楽を味わう日々を願うよりも、

地獄、すなわち憎み、恨み、怒り、嫉妬など自分の心を  
苦しめるようなものを作らない事が大切であるというように  
解釈すると、理解しやすいと思います。

私たちは、とかく自分の楽な暮らしや贅沢な生活を望むものです。  
もちろん、これ自体は悪ではありませんが、  
問題はこのために他人のことより自分のことを優先する気持ちが  
生まれることです。

いわゆるエゴの走りです。自分のことが最大の関心事であって  
他人のことはどうでも良い事になってしまうと、  
どうしても回りから孤立してしまいます。

そうすると他人との対立が多くなります。  
また、この傾向が自分だけでなく、回りの人々にも伝染すると  
その集団は喧噪の集団になります。

絶えず、いがみ合い、いじめや嫉妬が渦巻く集団です。  
こんな集団にいても幸福になどなれるはずがありません。

まず、自分自身だけの利己的な幸福を願うよりも  
地獄を作らないことです。  
回りの人々と協調して暖かい集団に属することです。

そのためには、自分の利己的な欲望は抑えるしかありません。  
それが自分を不幸にしない方法なのです。

本文 今回のことわざ：舌の剣は命を絶つ  
(したのつるぎはいのちをたつ)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「舌の剣は命を絶つ」です。

このことわざの意味は、  
言葉には十分注意をしないと、時には身を破滅させるような  
事も起こる。という意味です。

単純ですが、非常に教訓的なことわざだと思います。  
そして、現代においてもこのことわざにぴったりの事例も  
少なくないのではないのでしょうか。

「口は災いの元」ということわざもありますが、意味は同じです。  
ただ、今回取り上げたことわざは、災いであるだけでなく、  
私たちが絶体絶命の事態に陥るのは自分の舌のせいである場合が  
多いという意味を含んでいます。

嘘をついたり、他人を必要以上に批判したり、恨み言を言ったり、  
妬みや嫉みからの毒のある言葉や怒りからの言葉など、  
相手に必要以上に働きかける言葉は非常に危険です。

我が身を滅ぼすことも十分にあるのです。  
言葉を整えるということを怠ると、人とふれ合うたびに危険が増します。

社会的に死ぬのは本当に、この言葉の使い方を誤り、  
またそれを直そうとせず、回りを敵にした人々の反作用です。

自分から発する言葉がやがて自分に返ってくるのです。  
返ってきて嬉しい言葉を発しましょう。

間違っても怒りや恨み、辛みの言葉は発しないように、  
飲み込んでしまうことです。  
そうすれば自分には返ってくることはありません。

本文 今回のことわざ：安きに危きを忘れず  
( やすきにあやうきをわすれず )

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「安きに危きを忘れず」を選びました。

このことわざの意味は、  
世の中がうまく治まり順調なときでも、将来ことが起こることを  
予想して準備を怠らないようにしなければならない  
という意味です。

物事が順調にいつているとき、順風満帆のときは  
どうしても油断がでてきます。

余裕が出るのはよいのですが、それが度を過ぎると気のゆるみになり、  
油断が出てきます。

こころが今にだけ向いていると、万一のときへの心構えが  
できません。いざというときにあわてふためいてしまいます。

そして、今までの順調が一変して逆境へと変貌します。  
人生の転落が始まります。

「勝って兜の緒を締めよ」ということわざもありますが、  
同じように順調にこころまで許さず、常に備えを忘れないことが  
今の順調を維持する最大の方法なのです。

どうしても安きに危きを忘れてしまうのが人間なのです。  
心がけて生きていくことが危きを回避することへと  
つながります。

平凡な毎日の中にこそ、危きへの備えをすべきです。

本文 今回のことわざ：断じて行えば鬼神もこれを避く  
( 断じておこなえばきじんもこれをさく )

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「断じて行えば鬼神もこれを避く」です。

ことわざの意味は、  
覚悟を決めて物事を断行すれば誰もこれを妨げるものはいない。  
という意味です。

普通の人、毎日の生活の中では  
ほとんどが平凡な日々であると思います。

平凡であることが悪いことではありません。  
とんでもない不幸が突然襲ってくることを考えれば、  
何事もなく平凡に暮らせることもありがたいことです。

しかし、そんな毎日の中にもある時はどうしても大きな決断をしたり、  
あるいは大きな場面に直面しなければならないときがあります。

そのときに大抵の人はどうしていいか分からず、  
あるいは分かっても行う勇気が無く、または自信が無く、  
躊躇してしまうのではないのでしょうか。

そのようなときには、このことわざを思い出して下さい。  
「断じて行えば鬼神もこれを避く」

これを信じて勇気を出すことです。  
このことわざは確かに真理の一面を言い当てています。

人間が信じて無心に行動するとき、そこには鬼神も近寄りやすい  
雰囲気があります。

他人言葉や結果を恐れては駄目です。一つにころを決めて  
そのことに全力を尽くす、これが断行するということです。

そして、結果は確かに良くないときもあるかも知れません。  
しかしその結果にもかかわらず、自分のころはやるだけはやった  
という気持ちが持てるはず。

やった方がよいと思っても、勇気が無くできなくて  
その結果を受けるよりも、たとえ同じ結果であっても、  
やれることを断行した方が諦めもつくというものです。

やるときはやる、無心に、一生懸命に。  
そのときには鬼神も近寄れないのですから、  
怖いものなど無いでしょう。

ここが勝負というときは、このことわざを思い出して  
がんばってみて下さい。

本文 今回のことわざ：陰徳あれば陽報あり  
(いんとくあればようほうあり)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「陰徳あれば陽報あり」です。

ことわざの意味は、  
人は常に正しく善良なこころを持って陰日向なく徳行をしたならば  
そのことはすぐには報われなくとも、必ずいつか良い報いが  
来るものである。という意味です。

しかし、現代はこれがなかなか報いが来にくい時代であることは  
否めません。

陰で一生懸命尽くしていても、十分な評価を受けなかったり、  
愛していても尽くすだけでは相手の愛を得ることはできない場合も  
あります。

また、会社での仕事には表に立つ人とどちらかという裏に立つ人が  
います。表の人は目立ちますから、人々に賞賛され、評価されますが、  
裏の人は大した評価はされないことが多いでしょう。

しかし、そんな回りの評価とは裏腹に真実の目から見れば  
誰がどれだけ徳を積んでいるかははっきりとしています。

現在の立場や肩書き、容貌などを脱ぎ捨てたときの  
本当の自分の姿が一番大切なのです。

人間性です。結果ではありません。  
もちろん、人間が完成に近づいてくれば、結果も限りなく成功に  
終始するはずですが、これは付随的なものです。

陰徳を積むことこそ、人間性を鍛えるには最高の方法です。  
表で良いことをするのは誰にでもできます。

しかし、誰にも評価されず、逆に馬鹿にされてでも  
人々のために辛い思いを我慢して徳を積むことができる人は  
あまりいません。

大いなる包容力と愛に裏打ちされた大きなこころがなければ  
無理なことです。

こうした人には、その徳の力故にやがて違った方面から  
評価され、抜擢されることも多いと言えます。

でも、この結果を欲しがっては駄目です。陰徳はこれを無視して  
行うから陰徳なのですから。

欲しがらないのになぜか与えられるのが本当です。  
最後に勝負するものはその人の人間性です。

これがすべてです。

本文 今回のことわざ：精神一到何事か成らざらん  
(せいしんいっとうなにごとかならざらん)

---

こんにちは。大和武史です。  
今日は「精神一到何事か成らざらん」を選びました。

このことわざの意味は  
人間は一つのこと全神経を集中して努力すれば  
成し遂げられないことはない  
ということです。

精神統一という大げさですが、  
精神を集中して取り組むということは  
一生懸命努力すると言い換えてもいいでしょう。

ただ漫然とやるのではなく、  
こころを集中して色々なことに配慮して取り組む  
あるいは、先のことや過去のことを想定、分析して

対策を立てることなど  
深いレベルでの仕事に心がける必要があります。

一つの仕事をやるやり方は  
百通りだってあります。

やってみなければ結果は必ずしも分かりません。  
しかし、毎日の精神集中は本人にとって

大いなる思考の拡大作業に他なりません。  
小さい思考にのめり込んでいると  
人間まで小さくなってしまいます。

おおらかな、伸びやかな人間性を維持するためにも  
精神一到です。

何事か成るのは結果として当たり前です  
偉大な仕事には相応の結果が当然です。

精神一到の継続こそ、  
非凡な自分へのキーワードです。

本文 今回のことわざ：巧言令色少なし仁  
(こうげんれいしょくすくなしじん)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「巧言令色少なし仁」です。

これは論語からの出典で、ことわざの意味は  
言葉を飾ってうまく言ったり、顔をうまく繕い、  
愛嬌を作って、人の心を自分に惹きつけようとする者には  
誠意のある人物が少ない  
という意味です。

世の中には色々な人がいて、世渡りのうまい人とそうでない人がいます。  
世渡りのうまい人は、上手に話をし、上役に気に入られたり、  
部下を従えたりすることがうまいですね。

この結果、自分の能力は大したことがないのに、  
良い仕事をする場合があります。

これはこれで間違いでもないし、悪いことでもありません。  
回りの雰囲気自分を自分へ有利なものにするのは  
一種の能力であり、実力でもあります。

問題は、そうした人がそれにばかり頼ってしまって  
自分で努力することをしなくなったときでしょう。

人当たりだけで勝負することは無理なのです。  
悪までも付加価値なのです。

本当の能力に付け加わるだけなのだと認識すべきです。  
この世渡りだけで生きようとする、いろいろと間違いが生じて  
きます。

口で仕事をするわけですから、良い方へ誘導しようとする行為が  
出てきます。うまく言いくるめようとしたり、  
屁理屈で無理強いしようとしします。

その結果、たとえうまくいったとしてもまさに巧言令色です。  
味わいが酸っぱいですね。

何か冷たい印象を人に与えることになりまし、  
本当に信用される人物には成りません。

孔子は巧言令色の薄っぺらさ、無味乾燥さを説き、  
それよりも仁に生きるべきだと教えました。

仁とは言い換えれば愛です。  
人を思いやる気持ちです。この母性的な感情にこそ  
人間らしさがあると言われたのです。

まさにそのとおりです。最後は本音で勝負です。  
理屈や肩書きや地位などある程度までです。通じるのは、  
最後はその人の本性がすべてを決めます。

巧言令色少し仁です。  
仁、愛深き人物となるよう心がけましょう。



本文 今回のことわざ：待てば海路の日和あり  
( までばかいろのひよりあり )

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「待てば海路の日和あり」です。

ことわざの意味は、  
気長に待っていれば、好機が必ずやってくる。という意味です。

待つということはどちらかといえば、消極的に受け取られている  
のではないのでしょうか。

でも、実は待つということほど大変なことも少ないのです。  
徳川家康は言いました。  
「鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトトギス」と。

現代女性ももう彼が言い寄ってきてくれるのを待つような人は  
少なくなったのでしょうか。

待てる人が少なくなりました。  
待てない人で一杯になってきています。

待つことができる人は強い人です。  
待つためにはきっと叶うと信じる必要があります。

信じる人は幸いかな。待つことができるから。  
待つ人は幸いかな。強い心と堅実な人生を手にするだろう。

時期を焦ると成就することも成就しなくなります。  
出世にしても、縁談にしても、そのほかの大切なことにしても  
時期を得ることがどれほど重要なことかを知る必要があるでしょう。

「待てば海路の日和あり」です。  
待つべきときはじっと観念して待ちましょう。  
待てる人には、大きな実績を受けることができるでしょう。

15号の「巧言令色は少し仁」は「巧言令色は鮮し仁」の  
間違いでした。お詫びして、訂正します。

[ ことわざ・格言から人生の教訓を学ぶ ] 2000 NO.17

今回のことわざ：天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず  
(てんはひとのうえにひとをつくらずひとのしたにひとをつくらず)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は福沢諭吉の言葉で、民主主義の原理です。

ことわざの意味は、  
人間は生まれながらに平等であって、本質的に言って身分の上下、  
貴賤の別、貧富の差などがあってはならない。  
という意味です。

福沢諭吉の「学問のススメ」にある言葉ですが、  
なかなか含蓄のある言葉です。

要するに人間は平等であるべきだと言っているわけですが、  
これは結果が平等であるという事ではありません。

つまり、結果平等、地位や肩書き、名誉や成績などが  
同じである方がいいということではないので間違わないで下さい。

基本的な人権についての平等なのです。  
誰でも本質的に同じ価値を持って存在しているということですね。

しかし、結果はその人の生き方によって変わるのが正しいのです。  
つまり、努力や工夫をした人には成功が、  
怠惰な人には失敗が訪れていいのです。

公平という観点ですね。  
基本的な価値の平等と公平な結果こそ  
民主主義の基本です。

これは学問を進めた人にはだんだんに分かってくることから  
福沢諭吉は学問を奨励したのでしょう。  
正しい観念を持つことこそ大切なことであり、  
現代人に最も必要とされていることではないでしょうか。

今回のことわざ：出船に船頭待たず  
( でふねにせんどうまたず )

---

こんにちは。大和武史です。  
今回のことわざは、「出船に船頭待たず」です。

ことわざの意味は、  
ひとたび好機と見たらすぐ実行しないとチャンスは  
待ってなどはくれない。昔、風待ちをしている帆船は追い風になると  
そのとき、船に戻って来ない客を待たずに出発したものの。  
という意味です。

これ以外にも幸運の女神は前髪しかないというような事も言われます。  
通り過ぎる前につかまないとつかめないということですね。

要するに、チャンスは一度ということですよ。  
躊躇していたらせっかくのチャンスを逃してしまう事があります。

人生には誰でも一度や二度は大きな決断の時があるものです。  
そのときに優柔不断に陥っているとせっかくのチャンスを  
つぶしてしまうことがあります。

かと言って、何でもかんでもやってみなさいと言うわけではありません。  
十分に検討してから悔いのない方を選択するのが正しいのは事実です。

しかし、物事には検討して時間をかければ解決するものと  
そうでないものがあります。

現在の自分ではどうしても分からないことでも  
今、選択しなければならない時もあります。

人生というのは基本的にはそういうものです。先が見えないからです。  
また、あらかじめこの先のことが全部分かっていたら  
つまらないものになってしまうでしょう。

そうなれば、努力する必要も余地もありません。  
運命はすべて決まっていたら、努力などしても単なる悪あがきにしか  
過ぎなくなります。

この意味で人生は完全なる自由劇です。自分の思考や行為の結果が  
自分の人生を形造ります。

自らの選択によって自分の人生を決めているのです。  
人生でここ一番という大チャンスが巡ってきたら、  
結果を恐れずにトライしてみましょう。

誰の人生でもない、自分の人生なのですから、自分の納得のいくように  
挑戦してみようではありませんか。

成功を祈ります。

今回のことわざ：人を愛すれば即ち人之を愛す  
(ひとをあいすればすなわちひとこれをあいす)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「人を愛すれば即ち人之を愛す」を選んでみました。

ことわざの意味は、  
自分が人を愛する気持ちを持って接すれば、人にも愛されるようになる。  
人に愛されたいと思ったら、まず自分が他人を愛さなければならない。  
という意味です。

孔子の言行録からできたことわざです。  
大変重みのあることわざだと思います。人生のなんたるかを良く知った  
人が語った言葉です。

皆さんは他人から愛されなくて悩んだことはないでしょうか。  
そして、それを相手のせいとっていないでしょうか。

相手に愛されるためには、まず相手を自分が愛することが  
必要です。自分が愛する気持ちを持って相手に接するから  
そのいくらかが相手から返ってくると思うことです。

もちろん、片思いということもありますから、こちらが愛すれば  
必ず相手が自分を好きになってくれるということではありません。  
しかし、親友とか夫婦とか長い年月を共に生きる相手を  
作るためにはこれを実践しないとうまくいきません。

自分の中に相手への愛がなければ長続きしないのです。  
なぜなら、その関係が壊れても困らないからですね。  
相手を本当に愛していたら関係が壊れたら困るから、  
壊れないように手を尽くすから壊れにくいわけです。

二人が愛し合っている関係はある意味で時間を超える能力を  
持ちます。恋愛カップルが二人でいると時間がすぐに  
過ぎてしまうように感じたり、何十年という長い間一緒に  
過ごしても続くのは愛の能力に寄るところが大きいのです。

現代は、親子関係や親戚関係、夫婦関係、友達関係など  
人々の関係が複雑になり、かつ希薄になっているように  
思います。そして、冷たい関係になってしまっているものも  
少なくないのではないのでしょうか。

よりよい人間関係を築くことは、そのまま幸福な人生を築くことに  
直結します。そのために、「人を愛すれば即ち人之を愛す」  
を実践してみてもどうでしょうか。

皆さんの体験や感想など、あるいは意見や反論でも構いません、  
こうしたことに対する読者の意見交換をしたいと思います。  
下記のアドレスに掲示板を設置しましたから率直な意見の  
投稿をお願いします。

今回のことわざ：神は寸をもって人を量らず  
(かみはすんをもってひとはからず)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回は「神は寸をもって人を量らず」です。

ことわざの意味は、  
神は人間を、背が高いから偉いとか、  
低いからどうのと品定めしない。  
外見の善し悪しではなく、  
その心の有り様によって人を判断するということ。です。

人間はその肩書きとか、身分とか、地位やお金の多寡などで  
量られるものではありません。

これは現代の日本であれば、小学生でも習っていることです。  
しかし、現実社会においてはそのとおりになっていないのでは  
ないでしょうか。

私たちはとかく総理大臣は偉いとか、富豪は一目おいたり、  
会社でも社長には言いたいことも言えないのが現実でしょう。

この世は身分や地位やお金がものを言う社会になっています。  
これらをふんだんに持っている人はやはり有利に扱われているのは  
否定しようのない事実です。

でも、それはあくまでも社会的な取り扱いにおいてであって  
人間の値打ちそのものがそれらのもので決まるわけではありません。

たとえ、会社では社長であっても家庭では召使いのような人も  
あり得ますし、その逆もあります。

肩書きとか地位とか、この世的な産物を脱ぎ捨てたときの  
裸の自分が一番大切な自分です。

退職しても部下たちに慕われる人であるかどうか社長の値打ちです。  
また、退陣してもなお国民に期待されるのが本当の総理です。

この意味では、こうした身分や地位やお金がふんだんにある人は  
本当の自分の姿が見えなくなりやすいです。  
自分が偉いと思ってしまうのです。

その結果、天狗になり、回りに冷たい人となってしまいます。  
普通が一番いいのです。普通であること、平凡であることを  
感謝すべきです。

平凡であるから富豪になる夢も見れるし、偉くなる夢も持てます。  
また実際になれなければ、それらを無くした後で世間の豹変ぶりを  
身にしみて味わう必要もありません。

ものは考えようと言いますが、本当です。  
まず、裸の自分を豊かにすることです。もちろん、心や精神の  
ことです。そして、その豊かな自分が十分の力を出し切れば、

自然と身分も地位もお金も値打ち相応に付随してくるでしょう。

いつまでも平凡である人は、いつまでも平凡な自分にいるからです。  
お金など無くても自分の心を豊かにすることはいつでも可能です。

人間は神と同じく成長することができるようになっていきます。  
無限の可能性を秘めているのは誰でも同じです。  
その意味で、現在の大きさと人は決められないわけです。

将来どうなるかは分からないという意味で、  
「神は寸をもって人を量らず」だと私は思います。

今回のことわざ：忍の一字は衆妙の門  
(にんのいちじはしゅうみょうのもん)

---

こんにちは。大和武史です。  
今回はこのことわざを選んできました。

意味は、  
堪え忍ぶことは何事につけても成功に導く基本になることである  
という意味です。

衆妙という言葉は聞き慣れないですが、天地万物の微妙な道理という  
意味ですぐには分かりにくいけれど隠れた真実のような理解でいいと  
思います。

衆妙の門とっていますから、隠された真実への入り口というような  
解釈で良いと思います。  
つまり、忍耐とは人生を輝かせるための真実の力の一つであるという解釈  
です。

最近はこの人という言葉は死語になっている感じさえします。  
キレルといいますが、若い人から年寄りまですぐにキレルのが  
現代人ではないでしょうか。

忍の心が不足しているのです。だから、人間関係は長続きしません。  
またぎくしゃくします。ガラスのような壊れやすい関係ですね。

忍とは我慢することとは違います。無理に我慢する必要はありません。  
どんどん議論すればよいのです。  
しかし、キレルのは自由を放棄しているのと同じなのです。  
不自由になって行くのです。

本当の自由は忍を持って秩序を維持していくところに自由があるのです。  
忍によって社会としての秩序が保たれ、  
結果として自分の自由が保障されます。

一人一人がきれてしまって、暴力を振るっていたらこの世には秩序が  
無くなってしまいます。  
忍と自由は表裏一体のものです。コインに表と裏があるように、  
全く似つかぬものですが表がなければ裏もなく、  
ともに共存するべきものであると思います。

忍を実践するには大きな心が必要です。  
何でも自分の言いたいことも言えずに我慢している姿を想像しがちですが、  
全く違います。

相手のいうことを良く理解し、大きな心で包み込むような人格が  
必要なのです。

忍とは人生の達人が行じる生き方であり、人生の徳目の一つです。

今回のことわざ：明日ありと思う心の仇桜  
(あすありとおもうこころのあだざくら)

---

こんにちは。大和武史です。  
暑くなりましたね。夏が近づいていますね。  
伊豆諸島では地震が頻発していますし、大変だと思いますが、  
体に気を付けてがんばりましょう。

今回のことわざの意味は、  
人生の無常なことを表したことわざ。「明日ありと思う心の仇桜  
夜半に嵐の吹かぬものかは」という親鸞上人の歌に基づいたもの。  
我々の人生はいつまでも長く先があると思っているのは間違いである。  
桜に吹く夜半の嵐のような突然の事故や病気で、いつ死なないとも  
限らない。だから一日、一日を大切に生きていかなければならない。  
という意味です。

要するに、人生とはいつまであるか分からないものであるのに、  
明日があるさと言って今日のことをなおざりにしていると、  
今夜のうちに死んでしまう事だってあるということですね。

確かに先送りということは、先があるという事を前提とした話であって  
自分が今日までしか命がないと思えば絶対成り立たない事です。

また、先送りだけに限らず、明日の命を前提にしている事は  
いくらかもあります。たとえば、怠け心、怠慢です。  
怠ける心は、もし自分の命が今日一日しかないと思っていたら  
最後の一日をだらだらと過ごすはずがないですね。

もちろん、何をするかは分かりませんが、最後にしたいことを  
心ゆくまでしようとするはずです。いつものことをだらだらと  
怠けてやるような事は考えられません。

また、優柔不断です。今日限りに命なら、最後にどうしても  
やりたいことがあればやろうとするはずですね。  
やりたいけれど、難しそうだからとか、大変な労力があるからとか  
言っとうやろうとしない、でも諦めることもできないという  
優柔不断はないでしょう。

そして、これは真実なのです。  
私たちは誰一人として明日の命を保証された人はいません。  
今日生まれた赤ん坊でさえ、突然大地震で病院がつぶれて死んでしまう  
かもしれないのが人生なのです。

人生のはかなさです。諸行無常ということですね。  
この世のものは何一つとして不変のものはなく、すべてのものは  
移ろいゆくものであり、明日を保証されたものではないのです。

だからこそ、今日を有意義にする必要があるのです。  
明日の命を心配して嘆いていても、同じです。  
有限な時間なら有意義に使うことしかありません。

明日はないと思って今日を充実させていけば、  
その積み重ねが輝かしい明日を作っていくのです。



現在の輝かしいものに変えることが、人生を黄金に変える秘訣です。

どうぞ実行してみてください。  
「明日ありと思う心の仇桜」です。

今回のことわざ：楽は苦の種 苦は楽の種  
(らくはくのとねくはらくのとね)

---

こんにちは。大和武史です。  
台風3号はどうでしたか、被害はなかったでしょうか。

今回は「楽は苦の種 苦は楽の種」です。  
このことわざの意味は、  
今楽ばかりすれば、将来必ず苦労しなければならない時がある。  
また、今苦労しておけば先へ行って楽をすることができるもの。  
という意味です。

私たちはとかく楽を求めがちです。  
楽しんでお金をもうけることとか、同じ給料なら楽な仕事をしたい  
など、楽を知らず知らずに求めてしまいます。

しかし、このことわざはその楽にはいずれ高い代償が払われることになる  
と言っているのです。

楽は苦の種ですから、いずれ苦が来たときにいつも楽に生きている人は  
その苦に絶えることは難しいでしょう。

逆にいつも苦にある人は、楽が訪れたときはその楽に  
大きな幸せを感じることでしょう。

このように考えると楽ばかりしている人生とは本当に理想的なものか  
どうかは疑問です。

いつも苦の中にあるのも嫌ですが、適度な厳しさは絶えず持ち続け  
なければなりません。

まず、己に厳しくあることを心がけるべきでしょう。  
そうすれば楽にどっぷりと浸ってしまうことはありません。

自分に厳しく自分を甘やかさないように生きれば  
もはや楽は苦の種ではありません。

毎日の生活に流されてつい楽を求めてしまいがちですが、  
楽を避ける必要はありませんが、その楽におぼれないように  
自分に厳しくあることを心がけて下さい。

そのためにはしっかりとした人生観を磨く必要があるでしょう。  
どうせ一度の人生なら、立派なものにするよう  
自分をコントロールすべきです。

今回のことわざ：君子危きに近寄らず  
(くんしあやうきにちかよらず)

---

こんにちは。大和武史です。  
相変わらず伊豆諸島では地震が続いていますね。  
私が幸福への招待状で書いたとおり、当分火山活動が継続するでしょう。  
危険ですから、近寄らずにすむのなら近寄らない方がいいです。

今回のことわざはこれにぴったりかも知れません。  
このことわざの意味は、  
徳が高く品位のある人格者は絶えず身を厳しく律して守っているので  
自分を傷つけるような危険なところは避けるという意味です。

君子というか、賢い人はと言った方がいいでしょう。  
賢い人は、わざわざ危険に飛び込んでいくような  
馬鹿な真似はしないということですね。

また、火遊び、不倫とか麻薬、覚醒剤のたぐいなど  
好奇心につられて始めるとにっちもさっちもいかない状態に  
なることがあります。こんなものにも近づかないという事です。

しかし、天変地異の場合はそうも行きません。  
善良な人でも賢い人でも天変地異に巻き込まれて死ぬ場合もあります。  
でも、そういう事になる前になるべく情報を収集しましょう。

ある日突然に大地震が起きる場合もありますが、  
ほとんどの場合はその前に予兆があります。  
伊豆諸島のような火山活動に伴う地震の場合はかなりはっきりと  
わかります。

現在のように地震が頻発していたら、  
もう完全に危きに近づいていると思って間違いないでしょう。  
島の方はなかなか家を出るのが決心が付かないでしょうが、  
また、その近辺の方も細心の注意を払うべきです。

火山活動はだんだんと本土側へ移動しているように  
私は思います。本土も含めて富士火山帯に属する地域にお住まいの方は  
少なくとも用心だけはしておいて下さい。  
どこから噴火しても不思議はありません。

このあたりに旅行される予定の方もできるだけ避けた方が  
いいと思います。  
君子危きに近寄らずです。また、火遊びをしている人や  
しようと思っている人も近寄らないようにして下さい。

一生を棒に振るような事になりかねない事にもっと注意して  
意識して遠ざかるべきです。

今回のことわざ：灯台下暗し  
( とうだいもとくらし )

---

こんにちは。大和武史です。  
毎日暑いですね。私も少しお盆休みを頂戴しました。  
しばらくお休みしてごめんなさい。

今回は「灯台下暗し」です。ご存じの方も多いと思いますが、  
ことわざの意味は、  
灯台は沖の遠くを照らすが、すぐ近くの海面は暗い。  
自分の身近なことには無知である。という意味です。

この灯台下暗しが意外に多いのです。  
人は皆、自分のことに一生懸命ですけれど、得てして見落としがちなのが  
他ならぬ自分のことです。

他人はよく見えるのです。色々な癖とか、悪いところとか良く知っている  
のですが、自分の事というと意外に分からないのです。  
たとえば、自分の癖、よく分からないですね。また自分の長所や短所も  
意外に分かりません。

自分で考えるよりも他人に聞いた方がよく分かるくらいです。  
自分のことはよく見えないわけですね。いや、見えないというよりは  
見ようとしなないわけです。周りにばかり気を取られて自分に気が回らない  
のです。

その結果、自分が周りの人からどう思われているのか分からない人の  
なんと多いことでしょうか。あるいは、自分の思っているのと周りが  
思っている自分とのズレが非情に大きいのが現実です。

まず、自分自身を中立によく見ましょう。他人のことよりも関心を持って  
当たり前です。そして、長所と短所をよくわきまえ、長所はなるべく  
伸ばすように、短所は補うように努力するのです。

の  
たったこれだけのことをやれる人とやれない人では取り返しの付かないくらい  
の  
差が出ます。自分をよく見て、よく反省し、自分をコントロールできれば  
もう足下が見えないことはありません。

今回のことわざ： 備えあれば患なし  
( そなえあればうれいなし )

---

こんにちは。大和武史です。  
三宅島はいよいよ大変なことになってきましたが、  
できればみんな無事に避難してくれることを祈っています。

今回のことわざは「備えあれば患なし」です。  
意味は、  
万一の時に備えて普段から色々と準備をしておけば  
いざというときに心配がない  
という意味です。

きわめてシンプルなことわざですが、  
今一番大切なことかも知れません。  
人々は、明日に備えて今日準備しておくという習慣を  
忘れて久しいのではないのでしょうか。

小学校の頃は明日の学校の用意さえなかなかできずに  
親によく叱られたものですが、これができるようになると  
今度は逆にそれを楽にしようとすることを考えます。

つまり、学校に置いてくるとか、わざと持っていかないなどで  
同じように、私たち社会人も最初は仕事を覚えるのを  
一生懸命やるわけですが、慣れてくると今日の仕事から  
明日の仕事の段取りまでも今日のうちにやるようになります。

仕事ぶりが進歩したのですが、この間はいいのですが、  
次に、楽をすることを考え始めるのです。  
明日する仕事をうまく減らしてもらおうとか、  
誰か他の人に押しつけてしまおうとか、  
自分にとって有利なように考えてその段取りをするように  
変わってきます。

こうなると、備えあれば患なしという事から外れて  
怠けることを考え、楽に給料を稼ぐことに没頭します。  
ところが、その自分の段取りや計算どおりに事が運んでいる  
うちにはいいですが、予想外の事が起きたとき、  
一番被害を受けるのはこういうタイプの人なんです。

なぜなら、普段から楽ばかりしていますから、  
ここ一番というときに力がでないですし、周りから信頼されて  
いませんから、助力もありません。段取りと全く違う事態に  
あたふたと焦るだけで対応できないということになります。

備えあれば患なしの精神は、普段から地道にやり遂げている  
人にこそ適用されることです。

楽することばかり考えている人や毎日を風任せに生きている  
ような人には無縁の言葉だと思って下さい。  
まず、今日を地道に着実に生きることです。  
次に、明日の事も考えて今日のうちに準備をしておきましょう。

それが今日も明日も大過なく過ごすということなのです。

今回のことわざ：喉元過ぎれば熱さを忘れる  
( のどもとすぎればあつさをわすれる )

---

こんにちは。大和武史です。  
三宅島はとうとう全員避難となってしまいました。  
避難された方は大変でしょうが、がんばって下さい。

今回は、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」です。  
ことわざの意味は、  
どんなに熱い湯を飲んでも、のどを過ぎて腹に入ってしまうば  
もう熱くないものだ。  
苦しいことも過ぎ去ってしまえば、何でもないということ、  
また苦しいときに助けられたのを時間が経つと忘れてしまう  
ことをいう。

皆さんは、学校や会社へ通っておられることと思います。  
そして、そこでは色々な事件が起きているはずです。  
大きな事件もあるでしょうし、些細な事柄もあるでしょう。

そのような事柄から学ぶということを心がけているでしょうか。  
今日の事件、たとえばセールスに失敗したという事件から  
何も学ぶことがないはずはありません。  
たとえば相手への言葉遣いが悪かったせいかなと思うなら、  
明日は言葉遣いに注意してみましよう。

今日の経験をきっかけにして少しでも自分が良くなるなら  
その経験は人生の教訓になります。  
そのためには、喉元過ぎて熱さを忘れていては駄目です。

今日の事件を、家に帰ってもう忘れていては駄目なんです。  
良くない出来事というものは、今後の教訓としてのみ意味が  
あるのですから、まず振り返ってみて、原因を考えてみましよう。

そして、原因らしきことが思いついたら、それを改善するように  
気を付けてみるのです。できなくて元々、できれば大儲けです。  
このようにしてあらゆる事から学んでいく人は時間の経過と共に  
成長していきます。

平々凡々な人とは大きな差が出てきます。  
どうか心がけてみて下さい。自分が少し変わるかも知れません。

今回のことわざ：若いときの苦労は買ってでもせよ  
(わかいときのくろうはかってでもせよ)

---

こんにちは。大和武史です。  
シドニー五輪はいつも華やかですね。多くのメダルが取れば  
いいですが。

今回は「若いときの苦労は買ってでもせよ」というのを選びました。  
これからはなるべく身近なものを選んでみたいと思っています。

この意味は、  
青年時代の苦労は将来大成するための薬になるから、  
お金を出してでもした方がよいものである。  
という意味です。

私は個人的にこのことわざが好きなんです。  
私もそれなりに苦労を重ねてきましたし、これからも苦労は  
あるでしょうけれども、苦労を不幸と同一視しては  
悲しくなるだけです。

苦労そのものは本人が望まなくても来るものです。  
でも、その苦労をどう捉えるかで苦労の意味合いが違ってきます。  
単なる不幸や厄災と受け止めれば、苦労は憎むべきものになりますが、  
このことわざのように将来大成するための薬と受け止めれば、  
自分の中の気分は全然違ってきます。

そして、事実私も今までの人生を振り返ってみると  
苦労した分だけ他人よりも少し味があるかなという感じがします。  
苦労して悩んで、苦しみ、耐えてきたからこそ、  
人格に深みが出ますし、知恵が蓄積されます。

本当にこのことわざの言うとおりです。  
苦労というのはそのときは嫌なものですが、後からみれば  
自分の精神的な成長を促すカンフル剤であるわけです。

でも、私も買ってでもしたいとはまだ思えませんが。  
現在、色々と苦労している人はこのことわざを心に刻んでみて下さい。  
現在の苦労はきっといつかあなたの精神にとって肥やしとなるでしょう。

そう思えば苦労の中にあっても多少は明るく過ごせるでしょう。  
明るく過ごせれば、もうその苦労は苦労でなくなったのです。  
単なる雑事です。その苦労の精神的苦痛を乗り越えたと言えるでしょう。



今回のことわざ：禍福は糾える縄の如し  
(かふくはあざなえるなわのごとし)

---

こんにちは。大和武史です。  
鳥取県地震には驚きましたね。  
被害に遭われた方にはお見舞い申し上げます。

今回は、「禍福は糾える縄の如し」です。  
ことわざの意味は、  
禍と福はちょうどよりあわせた縄のようなもので  
表裏をなし、禍転じて福となり、また吹くが禍になったりするものだ  
という意味です。

よりあわせた縄といってもピンとこない人も多いかも知れません。  
縄自体を見たこともない人もいるかな。  
縄は正月の注連縄(しめなわ)に用いるものを想像してもらいましょうか。

あのように一本ずつの藁(わら)をよりあわせてなわをつくるんですが、  
その藁には福も禍もあるというたとえですね。  
それらがよりあわさって縄になっていると。  
だから、福と出る場合もあれば禍と出る場合もあるということです。

分かり易く言えば、コインに表と裏があるように  
表(幸運)と裏(不運)は表裏一体のものであるということです。

これをどう捉えるかということ、要するに今不運だと思っていることも  
見方を変えればそうではないかも知れないし、  
すぐに幸運に転じるかも知れない。また、逆に幸運に舞い上がっていると  
転じて不運に見舞われるかも知れないよということでしょうね。

幸、不幸は出来事自体ではなく、受け止め方の問題だからです。  
受け止め方によって幸、不幸は違うし、いつまでもそのままとも  
限らないわけですね。

現在不幸のどん底にあると思っている人は、そう自分が思っているから  
そうであるだけです。裏返してみたらすぐにでも幸運はやってくる  
のです。

また、幸運が続いている人は兜の緒を締めないと  
一転する可能性が十分にありますから用心して下さい。  
「禍福は糾える縄の如し」です。

今回のことわざ：過ぎたるはなお及ばざるが如し  
( すぎたるはなおおよばざるがごとし )

---

こんにちは。大和武史です。  
もうすっかり秋らしくなってきました。  
皆さんも、風邪を引かないようにしてください。

今回は、「過ぎたるはなお及ばざるが如し」です。  
意味は、  
物事にはすべて程度がある。度を超えてしまうと、  
足らないのと同じようなものだ。という意味です。

現代人には当てはまる人が多いのではないのでしょうか。  
極端から極端に振れる人がいます。  
やりだしたらとことんやる。人のいうことも聞かない。  
と思ったら、飽きたかとたんにぴたっとやめてしまう。

こんな人はいませんか。やりすぎはやらなさすぎと  
同じで、及第点は取れません。

物事には程度があり、節度を守って  
周りとの協調してやらないと自分だけ浮いてしまいます。

釈迦は中道ということをお説きしました。  
極端に振れないでこころを平静に保つ生き方です。

過ぎることも及ばないこともない生き方といえるでしょう。  
今はこの中道の価値が見失われているのです。

とことんやるのが良いことのような風潮があります。  
度を越えた行為は常軌を逸した行為へとつながります。

過ぎたるは及ばざるが如しなのです。  
ちょうど良いのが最も良いのです。  
何にでもちょうど良いところがあります。

そのちょうど良いところを目指す努力をしなければなりません。  
それができれば周りの人々とうまくやっていけることでしょう。